

「ここ」ってどこ？ 《立脚点》への問い
《アナザー・トリーティス・オヴ・ヒューマン・ネイチャー》
のための断片的試論（その１）

佐々木 健

Where am I when I say I am where I am?

Fragmentary Essays

towards

another *Treatise of Human Nature* (No.1)

SASAKI Takeshi

This and following fragmentary essays are intended as a preliminary discourse to my own inquiry into principles of *Human Nature*. I start with a discussion of the situation in which we are likely to find ourselves when we introduce and transplant even the simplest technical terms, for example, the phrase “operating system”, into the Japanese climate of opinion. Then I go on to compare two simple sentences: “It is cold here.” and “It is cold out here.” Where am I when I say I am “here”? It is one thing simply to say “here” in order to refer to where I am, and it is quite another to define “here” with an adverb “out” so as to specify where I am. What is the difference between these two sentences in terms of the standpoints from which they are uttered? What is the difference that lies behind the two ways of expression, or more correctly, the two “ways of thinking” that manifest themselves as such?

ぶろろうぐ

１ ロック、ヒュームに倣いて

（１）友人数名との語らいの中で「四方八方から」生じてくる難問のため、議論が行き詰まってしまった。もしかして議論そのものの方向が間違っていたのではないか、問題の立て方自体が適切でなかったのではないか。この辺のところから、まず根本的に考え直してみなければならないのではないか。哲学史に名を残している著名な人物でなくとも、私たち誰しも日常生活の様々な場面で物を考えようとすると、そのような体験をしたことがあるはずです。

ただ、市井の人である私たちは、往々にしてそこで思考をストップさせてしまうか、考え始めても、とことん考える努力を持続させることをせずに、途中で思考を停止してしまうことが多いのではないのでしょうか。ところが、哲学史に登場してくる人たち

は、そこから出発して、一つのテーマを徹底的に追究することをやめません。

上のような地点に達したときに、ある方面の「主題」を探究する前に、私たちの「心」の能力を吟味して、「私たちの悟性〔知性〕がどのような対象を取り扱うのに適しているのか、あるいは適していないのか」を検討することが最優先的な課題ではないかということに気付き、以後、約20年もの長きにわたって、「観念」という名の心の中の映像の分析や考察に多大な労力を注いだ人がいます。言うまでもありません。17世紀イギリスの哲学者で、『人間悟性〔知性〕論』（An Essay concerning Human Understanding, 1689）や『統治論2篇』（Two Treatises of Government, 1689）の著者であるジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）であります。

そのロックが哲学的名著である『悟性論』を刊行したときの年齢に、この断片的試論の筆者である私も少しずつ近づきつつあります。具体的に、「あと何年？」などといった野暮な問いを発するのはやめに

します。とにかく、近づくにつれて、この知的な愛知的探究者のスケールの大きさに賛嘆せずにはいられません。しかし、それ以上に驚嘆を禁じえないのは、同じ一つのテーマを、20年という長い期間にわたって追究し、しかもその間、このテーマについて記した草稿に推敲に推敲を重ねる地道な作業を怠らなかった、あの忍耐力であり、持続力です。そのような作業の遂行を可能にする「精神」とは一体、どのような精神なのでしょう。

かつて、戦前の日本の代表的な哲学者の1人である戸坂潤は、学問や生活はある一定の「方法」(meta-hodos)に従って、技術的に明確なある途を辿って行われる自覚的な営みである、という旨のことを語っています。主著の完成に向けてのロックの持続的な知的・学的努力は、まさしく戸坂が言うような「方法的自覚」を典型的な形で具象化した姿の一つである、と言っても過言ではないでしょう。

忍耐力と持続力の点で、この断片的試論の筆者なぞロックの足もとに及ばないこと、言うまでもありません。しかしそれにもかかわらず、ロックの忍耐力と持続力をほんの少しでも見習ってみよう。身の程をわきまえずに、大胆にもロック「に倣いて」この断片的試論を綴り続けてみたらどうなるか。これから、この紀要のスペースの一部を借りて試みてみようというのは、ただただ忍耐を失わずに、持続することに只管意を用い、断念せずに断章を書き連ねることにほかなりません。

(2)《すべての学問が人間の自然本性と、程度の差はあれ、何らかの関連を有すること、そして、学問によっては人間の自然本性からどんなに隔絶しているように見えるものがあるとしても、それらは何かしらの通路を辿って人間の自然本性へと舞い戻ること、このことは明白である。数学や自然哲学、さらに自然宗教といった若干の学問でさえも最終的には「人間の学」(Science of MAN)に基礎をもっているのである。》

あまりの不評と悲惨な売れ行きに落胆して、「印刷機から私産した！」と長嘆息せざるをえなかった29歳のときの処女作『人間本性論』(A Treatise of Human Nature, 1740)の「序文」のなかで、ヒューム

(David Hume, 1711-1776)はこのような趣旨のことを書いています。

旧来の諸々の学問を、そしてまた既成の諸概念を、ことごとく解体して、新しい地平のうえですべてを再構築しようとしたヒューム　ロックに勝るとも劣らないような忍耐力と持続力の持ち主であり、執拗なくらいねちっこく、とことん思索を突き進めたヒューム　そのヒュームが観念体系再建のための新たな拠点と見なしたのが、「人間の自然本性」(＝人間本性)という地平でした。

今日の世界史的境位にあって、人間存在がその根底から解体の危機に瀕しています。現代における人間の状況はそこまで深刻の度合いを深めています。今こそ、「人間本性」の徹底的な捉え返しと復権とを！ロックとともにヒューム「に倣いて」愛知的探究を行なう意味があるとすれば、それはまさにこの点に存すると言えるでしょう*。

*ヒュームの言う人間本性のもとに、近代のドイツの哲学者達が言う人間の「自然的素質」(Naturanlage)、「人間の本質」(das menschliche Wesen)、「類的存在」(Gattungswesen)といった概念をも含めて考えることができるのではないか、との暫定的な想定に、筆者は立っています。

なお、ヒューム「に倣いて」試論を綴ろうとする場合、叙述のスタイルについては、「学術論文」の体裁をとった *Treatise* よりも、むしろジャンルに拘らない自由な形式をとった *Essays Moral, Political and Literary* の表現様式に従うほうが面白いのではないかと筆者は私念しています。

2 「翻訳哲学」の基盤喪失

「世界概念」としての哲学と「学校概念」としての哲学……。人間ならば誰しものが無関心ではられない普遍的な問題(allgemeine Angelegenheit)についての智慧を探究する営みと、学校という場で哲学者という専門的職業人によって独占的に担われる特権的な「学問」と。ドイツの哲学者カント(Immanuel Kant, 1724-1804)は、「哲学」という知の営みにこうした二様の区別を設けました。

本来の意味での智慧を愛し求める探究の営み(「世界概念」)　これは本当にこわい、難しい、しんどい営為です。このことは否定できません。ど

こまでも、身も世もない辛さが伴います。この本来の哲学には固有の意味での難しさがあります。しかし、それはしばらく脇におきましょう。当分の間、私たち自身が抱く「哲学」についての先入見(「イドラ」)を一つずつ剥がして行きましょう。そのうえで、本来の困難を伴う哲学的思考の営みに向き合うことにしましょう。

まず、考察の手始めに、欧米産の哲学思想が日本の論壇や学界に紹介される場合を考えてみましょう。

日本語の土壌に移しかえられるとき、どのような変容がおこるか。漢語とやまとことばの通約困難性、インテリ言葉と大衆言葉との乖離、文化受容の脈絡の欠如といった事情から、私たちの感性にはどこか疎遠な翻訳哲学にとどまり、他の学問領域から孤立して蛸壺化する。こういう事態が生起することが容易に想像されます。既に、江戸期に受容された儒学(朱子学)は、その壮大な形而上学的な体系の全体性を解体され、日本の精神風土に受け容れやすいように改変され、しまいには個別的、断片的な倫理的徳目として残存するにいたる、という命運を辿りました。

ここではごく身近な例を取りましょう。OS というコンピューター用語があります。これが「基本ソフト」を意味するということを知ったのは最近のこと(お恥ずかしい!)。S はソフト、では O は? 一向に何のことか分らない。字引を引いて、operating system のことだと知って驚きました。そして納得しました。コンピューターという機械を適正に作動・機能させるための系統的な技術的方法の組織的全体。こう押さえれば、根本のコンセプトは理解可能。もしそうであるとするならば、この言葉を例えば政治学者が使ってもおかしくないのではないか、またそれは欧米でなら多分可能ではないであろうか。こう想定してみることが出来るはずです。国家機構や政党組織といったマシーナリーを正しく動かし運用するための社会的技術の全体的体系、という風に考えてもロジックに適っている。少なくとも、「オペレーティング」と「システム」とをそのように解釈して関連付けても論理的に矛盾しないではないか。となれば、コンピューターの専門家も政治学者も同じ基本了解の基盤のうえで語り合える*。

* 任意の文化圏の、特定の時代の「思想空間」という一定の広がりと深さをもった境域を離れて個別的問題領域に即してみても、同じような性格と構造をもった事態を指摘することが出来るでしょう。ある特定の思想家の思想体系を例にあげます。対象的な世界を認識するための理論的な枠組みの組織である学問「体系」と、全体と部分とが有機的な連関構造に立つことで機能しうる客観的世界である社会「制度」と、私たち人間の明晰な思考ばかりでなく無意識的思考をも根底から制約している言語における理論的内部脈絡である文法「構造」。これらの3者を「機械」になぞらえて、しかもこれらのものを類比的に捉え、かつ一個の統体の全体的な文脈の中で把握していこうとする基本的なスタンスの取り方が、この思想家の発想に見られます。ここでは、学問的枠組みの自己批判的解析(=認識批判)と社会構造の分析学(=「解剖学」)と言語体系の構造的把握とが、同じ問題探究の基盤と共通の論理の地平とのうで行なわれているわけです。学問が専門的な個別諸科学になる前の、したがってまた論理的にも歴史的にも「学際的」ということが語られる以前の、しかし本来的な意味での、総合的な「知の統一態」を確保しようとする問題意識が息づいていると評することができます。

ところが、日本語に訳すと、かたや「基本ソフト」、もう一方は(多分)「国家機構運営論」、「政党経営術」となる。さらに、それぞれが勝手な方向に一人歩きする。それぞれの専門領域の人たちが、自分の専門分野のなかで、言葉は悪いですが 自分だけの都合にあわせて勝手に、他人(他の領域)のことなどお構いなく、訳語を作り出すのです。これでは共同の足場も共通理解もへったくりもありません。

あとは、共通基盤を喪失するだけです。いやいや、そもそもの初めから、共通の基盤などなかったのです。ですから、同じような事態が哲学用語、思想体系についても起こるのです。起こって何の不思議もないのです。ですから、翻訳された哲学・思想は「秘教的」な jargon の羅列となる運命にあるわけです。

ある専門用語なり思想体系が日本の精神風土に移植されるとき、その用語なり体系がそこで生成してきた共通の基盤から切り離されて、その基盤とは異質な精神的場面に移されます。しかも、当の用語なり体系が当の基盤の上で一定の歴史的時間を閲歴す

る中で作り上げられて、現にあるように出来上がってきたはずです。こうした「生成」の過程から端的に切り離されて、いわば既製品として、出来立てのものとして、全く異質な場面に移されるわけです。このように移植されると、一つには、それぞれの専門的な学問分野ないし探究領域の固定された枠の中で、もう一つには、この異質な精神的環境における「言語体系」の独自のロジックの構造に従って、またこの言語体系に特有の脈絡の中で、それらの用語や体系は自己運動を開始することになります。翻訳された哲学・思想が他の分野との連関を欠いた jargon の羅列となる運命を免れないことがあるとすれば、それは一つにはこのような事情にもとづいている。このように問題の構造を整理することが出来るでしょうか。

哲学・思想が jargon の羅列へと転化することのほかに、私たちはいまだに、日常的な日本語による哲学的思索の地平を切り拓くのに成功していない、という事情があるのではないのでしょうか。私たちはこのことに想いを致さなければならないのではないのでしょうか。

いま仮に、専門用語の世界と日常語の世界とを、哲学的思考とその基盤というふうには押さえてみましょう。そうすると、もし専門用語と日常語との間に何らかの関連を確保することが要請されるならば、ここに、二つの側面をもった同じ一つの課題が現れてくるはずですが。

一面では、専門用語の世界と日常語の世界とをどのように相互規定的に連繫づけるかという問題があります。二つの世界の、いわば通約可能性 (commensurability) をある哲学者の言葉を借りれば、「共軌」関係を、確保していくことは、もう一面では、哲学的思考とこれがそこで行なわれる基盤をどう捉えるか、いかにしてこの基盤をとことん自覚していくか、自覚的な基盤に立って今度は哲学的思考をどのように再建していくか、というこれまた相互規定的な連繫づけの問題に通じます。こういう課題の前に私たちは否応なしに立たされるはずですが。

断片 1 「ここ」ってどこ？ 立脚点の

自覚を！

いま、中学 1 年の英語の授業風景をのぞいてみましょう。どうやら先生は英作文の問題を出しているよう。最前列に座っている A 君にこう質問しています。

「『ここは寒いね。』これを英語に直して下さい。」

「“It is cold here.”です。」

クラスで一番英語が得意な A 君の回答に対して、先生の反応は

「大変よく出来ました。」

これで、先生も生徒も安心して次の問題に進めます。メデタシ、目出度し。

でも、ちょっと待ってください。ことによると、こんな単純な事柄に、実に重大な問題が伏在しているのでは？そもそも、「ここ」ってどこなのでしょう。自分がそこにいて「ここは」と言っている、その「ここ」はどんなところなのでしょう。

まず、私とあなたが「ここ」だけで分かり合えるとすれば、「ここ」がどこなのか、どんなところなのか、が語り手と聞き手との間で既に了解されているからなのです。暗黙にであれ、明示的にであれ、とにかく了解が成り立っているのです。ところが、両当事者間では成り立っているこの基本了解に与らない第 3 者ないし局外者には、一向に見当がつかないのです。

次に、「ここは寒いね」という文 (センテンス) だけを取り出してみます。これだけでは「ここ」はどこなのか、どんなところなのか、理解に苦しみます。ところが、この文がどういうコンテキストで、あるいはどのようなシチュエーションのもとで発せられているかが明確に示されれば、たちまち了解できるようになります。センテンスそのものではなく、センテンスが発せられるコンテキストやシチュエーションが第一義的に重要になります。発話の行われる「場」が重要なのです。「場」そのものがものを言うわけです。

“It is cold here.”っていう単純な文は、もしかして、こういうところの問題に通じているのかもしれない。

さて、先ほどの教室に、誰も見たことのない「外

国人」が突然、入ってきて、こうまくし立てているようです。

「チガウ、チガウ。“It is cold here.”じゃない。“It is cold up (down) here.”とか “It is cold out (in) here.”と言うべきだ。」

先生も生徒も全員、一瞬あっけにとられます。しばらくして、あまり英語の得意でない子が言います。意外にも、この子だけが納得したような、すっきりした表情をしています。もしかして、この子は、先生とクラスの中の「優秀」な生徒たちとの間で出来上がっている暗黙的な了解に対して「異邦人」(étranger)であるのかもしれませんが。

「僕のように頭の働きが鈍い子には、こう言ってもらったほうが助かるな。そうすれば、『ここ』って具体的にどこなのか、分るじゃないか。山のてっぺんなのか、谷の底なのか。こんな北国で、なのか、こんな度田舎で、なのか。家の外か、屋内なのか。町のど真ん中なのか、人里離れたわびしい所なのか。ズバリじゃん。」

この「英語苦手」君の発言を承けて敷衍すれば、こう言えるでしょうか。

正確な英語の考え方がないしロジックに従えば、センテンスの中に、そのセンテンスが発せられるその基盤を表現する語が含まれる仕組みになっている、ということになるでしょう。英語のセンテンスはセンテンスとして、コトバによる言表として、語り手と聞き手との間の了解とか、センテンスが発せられるコンテキストやシチュエーションから、構造的に独立している訳です*。独立した文が、語り手の発想の立脚点、自分が立っている立脚基盤、そしてそれについて自分の価値判断を下すうえでの基準を表現しているのです。

*言うまでもなく、実際の場面では、発話行為それ自体は、語り手である「私」と聞き手である「あなた」との「間主体的」行為として現実的な行為となります。

だから、英語の方が日本語より優れているのだ、という短絡した結論を述べるつもりは毛頭ありません。また、このように言語的発話の構造が違うのだから、外国語の勉強に当たってはくれぐれも心しな

ければならない、などと偉そうなお説教することがここでの目的でもありません。

ポイントはただ一つ。以上のような単純な事例に照らしてみても、私たちの言語は、発想の立脚点、立言の発想基盤を自覚し明言するには、不便な構造を具えているのではないか。また、少なくとも、語り手(書き手)と聞き手(読み手)とが同じシチュエーション「において」ある、あるいは「コン」テキストそのものが暗黙の「共通」了解となっている、ということがなければ、発話・言説そのものが意味を発現させにくい性格を具えているのではないか。この認識をとことん徹底させることが不可欠でありましょう。この認識を踏まえて、私たちの日常語の世界を全般に亘って、不断に吟味検討し、この世界を構造的に対象化することが要請されてくるでしょう*。これが先に触れた課題を遂行するうえでの第一歩にほかなりません。

*さしあたって、ごく単純かつ抽象的に言えば、その「対象化」の作業への通路として、次の3つの方法を想定することができるでしょう。1. 発言・立言されていることに対して、語られていないこと・書かれていないことに着目すること、2. 発言・立言されたことに対して、その否定命題ないし反対命題を立ててみて、これが同じ妥当性をもって成立するかどうかを吟味すること、そして3. 詩人がよく、より高次の表現の地平を切り拓くために自覚的に「失語症」を引き受ける例に従って、あるいは「世界」が消滅した場合を仮定してみようと言ったトマス・ホブズ(Thomas Hobbes, 1588-1680)の「思考実験」を言語使用に適用して、いくつかの特定の語ないし語句の使用を自分自身に禁じたり、あたかもこれらの語・語句がそもそも存在していないかのように見做したりして、そこからどのような事態が生起してくるかを検討すること。

不断に自分の立脚点、立脚基盤を問い、それを自覚する努力が私たち一人一人に課せられていることだけは間違いありません。もし自立的な思考と言うものがあるとすれば、そこに至るには、その自覚をとことん突き詰めるほかに道はないのではないのでしょうか。言うまでもなく、自分の立脚点、立脚基盤という場合、私たちが現に置かれている歴史的社会的境域であったり、私たちの思考を条件付けている文化史的精神史的状况であったり、ものを考えるに当たって暗黙のうちに前提している価値意識や論理

的命題であったり、無意識のうちに私たちの心の内面に取り込まれてしまった社会規範の総体であったりするでしょう。ここまで問題が発展すれば、立脚点、立脚基盤の自覚はとことん歴史と論理の両面から自己と自己が置かれている境域を解析するという知的労働の性格を帯びるに至ります。